

学事始―描かれた自然―」として広汎な展観があり、細川公関係の写生図、動物標本等の既述のものが多数出品されたが、この腊葉は見られなかった。この機会に手にとって見ていただきたいと思ひ供覧する次第である。

昭和三十五年十月二十三日、ある新聞の記者は両陛下下の御視察について次のように書いた。

「肥後古文書のなかには十八世紀の半ばごろ細川藩が作った腊葉帖（植物標本帳）などが展示してあった。天皇陛下は楽しそうに手にとられて標本帳を繰られ、皇后陛下もかたわらからのぞきこまれるなどおむつまじい視察風景だった。最後に『細川家にこれだけたくさんの文書が残ったのは戦争がなかったのか』とお尋ねになり、戦火のきびしさを思ひ出されたようだった」

腊葉帖のごときを供覧することには問題も多いが、熊本での想い出として御記憶していただけたらこれに過ぐる喜びはない。

（熊本県熊本市）

『蘭方口伝（シーボルト失勃兒杜驗方録）』について

中村 昭

P・F・シーボルトがわが国の蘭学の進歩に大きな貢献をしたことは誰もが認めていることであるが、彼が日本人の門人達に実際にどういうことを教えていたかは、意外に知られていない。

もともとシーボルトは、後のポンペのように教育の目的で日本に来たのではないから、あまり系統的な教育をしなかったのも当然かもしれない。彼が日本の門人達に日本に関する論文をオランダ語で書かせて、それによって研究方法を指導し、またそれを自分の研究資料にもしたことはよく知られている。

この他に、シーボルトは長崎郊外の鳴滝で週一回ほどポリクリニック（外来診療）を行い、そこで門人達に臨床教育を施した。これも元来教育を目的として始めたものではな

く、シーボルトが来日以来名医としての評判が高くなったので、とくに出島の外で研究や診療をすることを認められたのであった。

一般の日本人は出島へ入ることは許されなかったから、日本中からシーボルトの名声を聞いて集まって来た門人達は、この鳴滝でシーボルトの医術の一端を見聞した。そのためここは鳴滝塾とも称せられるに至った。なお、まだ蘭方に未熟の門人は、日本人の塾頭格の者からも指導を受けた。塾頭格の者は年代順に言えば、美馬順三、岡研介、高良斎、戸塚静海と考えられている。

ここで教わったことを順序不同に記録したものが『シーボルト処方録』あるいは『シーボルト驗方録』などとして、何種類かの写本で伝わっているが、その伝本はあまり多くなく、江戸時代に公刊されたこともないようである。近年に至って、戸塚静海筆録の『シーボルト処方録』が戸塚武比古氏によってはじめて活字化され、公表された程度である。

呉秀三氏は『シーボルト先生、その生涯及び功業』の中で、戸塚静海筆録の『失効兒督処方録』と入沢恭平筆録の

『失伊^{シイ}牡^{ボルト}爾^ト督^ト先生方籍』から少し引用している。現在、東京大学医学図書館の呉氏旧蔵図書の中に、呉氏がこの二つの処方録を筆写したものがあつた。その他、筆録者不明の『シーボルト驗方録』をやはり呉氏が筆写したものも所蔵されている。しかし、この後者については呉氏は著書の中で触れていない。

演者が本学会で報告しようとする筆者不明の『蘭方口伝（シーボルト驗方録）』という江戸時代の写本は、表題が『蘭方口伝』となっており、中はシーボルトの常用薬物の分類などの前半と、「シーボルト驗方録」と題する後半に分かれている。古賀十二郎氏が『西洋医術伝来史』の中で、この前半部分から一部引用している。そしてこの後半は、和蘭紀元千八百二十三年（文政六年）より二十七年（文政十年）までと注記されており、呉氏筆写の『シーボルト驗方録』とだいたい同じものである。

演者は『日本医史学雑誌』第二九卷第三号に戸塚武比古氏によって発表された、戸塚静海筆録『シーボルト処方録』とこの『シーボルト驗方録』を比較検討して見た。詳細はいずれ論文にして発表したいと考えているが、ここで

その概略を述べる。

戸塚氏『シーボルト処方録』は三冊に分かれており、その第一冊、第二冊は『シーボルト験方録』と共通するところが多いが、第三冊は文体も異なり、内容から見ても明らかに戸塚静海がシーボルトから学んだ臨床経験を筆録したものである。第一冊、第二冊は『シーボルト験方録』と一致する部分が多いが、一致しないところもあるので、どちらがどちらを写したとはいえないが、それらの元になった治験録が鳴滝塾にあったのではないかと思われる。この両者をつき合わせると、誤字や意味の通じない部分を訂正できるところが多いのである。

また演者所蔵の『シーボルト験方録』には、高良斉が高熱を発して肺炎のような症状に移行し、種々の治療によって治癒した経過が詳細に記されている。静海の筆録では、高良斉の名前とその病状経過が分離し、錯簡を生じており、静海は良斉を直接治療したのではないと思われる。呉氏筆写の『シーボルト験方録』では、高良斉の名前は脱落してしまっている。

鳴滝塾では外来患者だけしか診察していなかったが、高

良斉などはここに住み込んでいたので、こういう重病の際には入院した形となり、おそらく同僚の医師の熱心な治療により快癒し、その記録が残されたのである。この場合、シーボルトがどういう指示をしたということは書かれていない。

ともあれ、この高良斉自身の症例はいままで明らかにされておらず、演者が入手した写本は、元の治験録からあまり隔っていない写本であるためにもこれを伝えていっているのではないかと思われる。

(神奈川県総合リハビリテーション事業団
七沢リハビリテーション病院)